

初雀鈴の如きが七八羽

西村麒麟（『鴨』）

2018年、明けましておめでとうございます。

「折々の季語」もちょうど100号となります。本年もどうぞよろしく願い申し上げます。

さて、新年早々に西村麒麟さんの第二句集『鴨』（文学の森）が届いた。第一句集『鶉』（私家版）が平成25年の刊行だったから、早い第二句集と言える。昨年の第7回北斗賞受賞記念の句集なのだろう。因みに「椋」の藤井あかりさんは第5回北斗賞受賞者だった。

私は麒麟さんの句がけっこう好きで、『鶉』所収の＜凍鶴のわりにぐらぐら動きよる＞なんて思い出すたびに口元がゆるんでしまう。このたびの『鴨』も楽しく拝読した。何となく新年に読むにふさわしい、めでたい愉快的な句集である。難解な取り合わせ俳句はなく、ほぼ一元俳句。それも季語そのものを詠んでいく姿勢が好きだ。ゆるくてとぼけていてしかもツボを押さえていて、好きだなあ。

獅子舞が縦に暴れてゐるところ
踊子の妻が流れて行きにけり
どの鴨も一回りする流れあり
虚子とその仲間のやうに梅探る
長身の千利休が果てたる日
少しづつ人を愛する金魚かな
鯖かなと柿の葉寿司を開きをり
秋の人ジョーロを持ってどこまでも
この人は玉蜀黍を呉れる人